



## 一人ひとり違う

現代文で学習した「身体、この遠きもの」（覚えてる？）の著者である哲学者鷺田清一さんの新著が図書館に入った。雑誌に掲載した原稿を集めた『素手のふるまい』（朝日新聞出版、2017）である。本の帯によると「人間の生きる技術としてのアートは、教育やケアの領域も横断する」とあり、さらに「現代社会の隙間で、生存の技法としてのアートと錯綜する社会との関係を読みほどく、臨床哲学者の刺激的な考察」ともある。私にはあまり「刺激的」ではなかったが（笑）、その中から、あるアートイベントにボランティアとして関わった人々の感想を取り上げた部分を引用してみよう。

\*

いま一つは、ヴォランティアとして参加した二十歳ほどの女性の言葉。—「正しいと思うことって一人ひとり違うんですね」。

「それ、はじめて知ったの？」と思わず返しそうになったが、その控えめの、しかし思い定めるようなまなざしに言葉を呑み込んだ。ふつう考えればあたりまえのことを、彼女はこの果てしない作業のなかで「発見」した、身をもって学んだのだった。

ひょっとすればこれは、日々の惣菜を買うときのふるまいにも似ていたのかもしれない。いまは手元に文献がないのでうろおぼえで、教育心理学者・茂呂雄二の言葉を引かせてもらおうと、買い物には臨機応変、柔軟な知恵が必要だ。おおざっぱな計算で済むこともあれば、ときに計算をやめたほうがいい場合もある。「今日は歩いてきたので大きな荷物はない」「三バック入りの方が安いけれど、いま収納庫が一杯だから」といった融通

の利く判断、さらには値切りといった交渉も、買い物ではあたりまえのことだ。ここに求められるのは、「頭のよさ」ではなく「賢さ」だ。そしてそれが、全体へのおおよその目配り、（密室ではなく）他の人たちとのやりとりのなかで、言ってみれば器用仕事（プリコラージュ）のかたちで進められる。

こう考えると、「教室での学びのほうこそ特殊な学びに過ぎない」ということにもなりそうだ。「正しいと思うことって、一人ひとり違うんですね」とつぶやいた女性は、これまでそういう知恵の使い方を「ライブ感覚」で体験したことがなかったのかもしれない。「世間知らず」？ それでいいではないか、いやそれはすごいことではないか、「世間」を知ったのだから、と感じいったのだった。

\*

前後の文脈がないから、今ひとつ頭の中に入ってこないかも知れないが、私が面白いなと思ったのは、「教室での学びのほうこそ特殊」という部分。確かにその通りかも知れないが、それを踏まえた時に、日比谷の行事の意味も見えてくる気がするのである。

というのも、合唱の練習や劇の準備などを通して、君たちは「ライブ感覚」で「一人ひとり違う」ということを肌身に感じ、学んでいるに違いないと思うからである。しかも、その違いを認め合い、まとめあげながら合唱や劇を創り上げていくわけで、もちろんその過程にはイヤなことや思い出したくもないこともあったかも知れないが、そういうこと全てが君たちを大きく成長させているに違いないと思われのである。